

(三) 虚無の帝王

グリーンメルスハウゼン子爵が、ミュッケンベルガー元帥麾下にヴァンフリート星系への征途に上ったのはその一ヶ月後のことである。周知のように、大混乱の上にも大混乱を重ねたこの戦いが、とにかくにも一応の終結を見るのは、さらにその一ヶ月後のこととなる。

ヴァンフリート宙域の会戦そのものは、戦いを起こしたそもその意図すら失念した両軍が、ひたすら戦闘のための戦闘を繰り返した愚戦として歴史に悪名を刻印されるに至る。干戈を交える前、帝国も同盟も戦いへの名分を高らかに歌い上げたが、戦いの過程と結末は、麗々しい修辭の醜惡な力リカチュアでしかなかった。

唯一、ヴァンフリート星域の会戦が歴史に対して意義を持ったとすれば、ラインハルト・フォン・ミューゼルの台頭を促したという、ただその一点に尽きるだろう。『生煮えのフリカッセ——』当のラインハルト自身が評したという、この戦いの経緯の中で、同盟軍の将官を捕虜として凱旋した若き准将の功績だけがひととき鮮烈な色彩でもって人々の視線を吸い寄せることになったからである。

爵位こそ子爵に過ぎないとはいえ、公式には帝国軍中将で制式艦隊の司令長官であるグリーンメルスハウゼンにとって、シュミットバウアー男爵家の当主などは自邸に呼びつけても非難される謂われもない程度の家柄に過ぎない。まして、名刺に書き込むわけにはいかないにしても『灰色の大公』時代からの今上皇帝の友人

とあれば、宮廷での有形無形の立場の差は天上と地表ほどのものもあると言ってもよい。

にも関わらずグリーンメルスハウゼンが、自らシュミットバウアー男爵邸を訪れたのは、ヴァンフリートから凱旋した当日の夕刻だった。

男爵邸と呼べるほどの豪邸ではない。敷地こそ広いが、建物は小さく、古びている。小金を持つている平民の方がよほど気の利いた屋敷を住まいとしているだろう。使用人もほとんどなく、先代から仕えているハンス・トーンという執事夫妻が同じ邸内に住み込んでいる程度だ。

通されたのは一階の応接室……とは名ばかりの食堂を兼ねた居間は、グリーンメルスハウゼン自身の、あまり頼りにならない記憶に抛れば、昏く、荒れた印象だった。

「お久しぶりでございます、子爵閣下」

出迎えた若い女性に、グリーンメルスハウゼンは改めて視線を凝らし、微かな困惑を覚えた。彼よりも頭半分ほど上背があり、華奢に見えるが大型の猫族の強靱さを秘めた肢体は、暗色の……明らかに喪服と分かる衣装に包まれていた。

エルフを思わせる繊細な細面は酷いほどに曇れて見えた。造作が極めて端正だけに、ほお骨が目立つほどに曇れ衰えた印象が本来の美貌を大きく損ない、廃墟を見る無惨さを感じさせた。

ただ、そのエメラルドグリーンの両目だけが、覇さを潜めた薄い金色の光を灯していた。

先代コルネリウスの長女コルネリア・ゲルトルーデ。先日のヴァンフリート宙域の戦いで兄ヨハン・クレメンツを喪った後、フリードリヒ四世のお声掛けで男爵家の継嗣を認められている。本人の希望に従い、大佐待遇で軍務省付き高等参事官としての帝国軍での地位も与えられた。むろん、これは名誉職でしかないが。

「何年ぶりかの。もう二〇年になるかな」

「お顔を見て、すぐに子爵閣下とは思いつきませんでした」

「コルネリア・ゲルトルーデ……極く近い人々だけが彼女をゲルタと呼び、そうでない人々はコルネリア、あるいはシュミットバウアー男爵夫人と呼ぶ……は薄く笑った。

「どのようなご用件で、この茅屋が子爵閣下のご来訪の栄を浴することとなったか、教えて頂きたいでございます」

「このような物言いをする娘だったか……グリーンメルスハウゼンは記憶の底を探したが、二〇年近く前の記憶のカードはすでにぼろぼろに古び、かつ不摂生の故の気力の衰えが、多大の困難なしに書かれた文字の判読さえ困難にしておせていた。

「そなたの兄は気の毒なことをしたのう」

「いいえ」

肩から背に流した、少し癖のある金茶色の髪がゆらゆらと左右に揺れた。

「兄は帝国と、皇帝陛下の御為に生命を捧げました。悔いるところのない人生だったと信じています」

「うむ……」

噂がある。

コルネリア・ゲルトルーデの兄ヨハン・クレメンツは、ヴァンフリート宙域での小戦闘での負傷が悪化し、戦病死した。これは公式の報告と記録である。しかし、致命傷にはほど遠く、数ヶ月の療養とリハビリで軍務復帰可能とされた程度の負傷だった。しかも、亡くなったのは、この帝都の帝国軍病院である。遠征中の宇宙艦内の医務室や、あるいは、無数の負傷者がすべての病院を占拠しているような、大会戦直後のイゼルローン要塞というわけではない。ヴァンフリートから約一週間、さらにイゼルローンから帝都まで四週間。すでに回復期に入っていたはずのヨハン・

クレメンツの容態がなぜ急変したのか。

件の戦いでヨハン・クレメンツの上位指揮官を務めたミューゼル大佐(当時)が見舞いに訪れた直後、その死が訪れた。ラインハルト・フォン・ミューゼル、ほかならぬ皇帝の寵姫グリューネワルト伯爵夫人アンネローゼの実の弟である。

「ミューゼルが、功を奪おうとしてシュミットバウアー大佐を密かに葬ったのだ」

「いや、功を奪おうとしたのではない。叛徒どもとの戦いで卑怯未練の行いがあつたことへの口止めを依頼して、硬骨なシュミットバウアー男爵にはねつけられた。その挙げ句に死人に口なしの謂いを実行したのだ」

しばらくの間、噂は人々の想像力の赴くまま、奇怪な翼を得て宮廷内を飛び交っていた。特にラインハルト・フォン・ミューゼルの親兄弟の仇のごとく忌み嫌っているフレイゲル男爵は、噂を広げること、内容をよりラインハルトに不利に傾けることに全精力を注ぎ込むかに見えていたほどだった。

だが、噂はすぐに立ち消えた。

ヨハン・クレメンツの葬儀を取り仕切ったヴィンフリート・フォン・リーフェンシュタール・ブラウンシュヴァイク公の有力な縁者でもあるリーフェンシュタール伯爵家の三男であり、ヴァンフリート宙域の戦闘でラインハルトに救われた当の本人が言明したのだ。

「ヨハン・クレメンツの死には何の謎も不思議もない。彼は帝国と皇帝陛下の御為に至誠を尽くし、その生命のすべてを捧げたのだ。ヨハン・クレメンツの名譽を損なうかのごとき言動をなす者あれば、それはとりもなおさず、このヴィンフリート・フォン・リーフェンシュタールの敵だ」

帝国最大の権門に連なる身分と、僅か五〇〇〇人の兵力で自由

惑星同盟軍の制式一個艦隊を翻弄して、ラインハルトによる救援劇を可能たらしめた功績とが、さしも口さがない宮廷雀たちをも黙らせた。当のフリーゲル男爵すら、ヴィンフリート本人に「舌が長すぎるようだ、卿は。少々、切り縮めてやろうか」と凄まじく、口にしなかった言葉を咽喉の奥に突き戻されたと言つ。

だが、そうだとしたとしても宮廷と、貴族たちの裏事情に通じるグリーンメルスハウゼンの元には最も奇怪な噂が届いていた。曰く、ヨハン・クレメンツはラインハルトと、彼の年来の副官であるジークフリード・キルヒアイスを暗殺しようとして、逆にその手にかかったのだ。そして、コルネリア・ゲルトルーデ自身もまた、その場に居合わせたのだ、と。

だが、グリーンメルスハウゼンはその噂にはさしたる注意を払わなかった。先代のコルネリウスとは多少の交際があったとはいえ、謹直な家風のシュミットバウアー男爵家は、グリーンメルスハウゼンにとって決してつき合いやすい相手とは言えなかった。当のヴィンフリートから、コルネリア・ゲルトルーデが男爵家を継嗣するについての口添えを頼まれていなければ、そのような貴族が存在したことすら失念していたかも知れない。

「今少し早めに来るつもりじゃったが、こちらも色々取り紛れての。それに、聞くところでは、そなたの方もなかなか客を迎えられるような状態ではなかったようじゃ。ようやくと時間も取れたことゆえ、今日はそなたに聞きたいことがあつての。こうして老体を押してまかり越したのじゃよ」

「ご用件を伺います、子爵閣下」

七六ではまだ老人と呼べません。グリーンメルスハウゼンは、あるいはそんな受け答えを期待したのかも知れなかったが、コルネリア・ゲルトルーデは完全に彼の期待を裏切った。不審そうに顰めた眉をそのままに、彼女の口調は平板を極めた。

「ふむ……」

右手で顎をつまぐり、今度こそはつきりグリーンメルスハウゼン是不審の視線を投げた。しばらくためらつかのように顎をつまぐつていたが、やがて、相手が冗談を解し得る心理状態にないらしいと判断した。最も端的な言葉をテーブルの上に放り投げたのだ。

「陛下からの内々の御錠じゃ」

「陛下から？」

エメラルドグリーンの目がぱつと大きく見開かれる。

コルネリア・ゲルトルーデの反応はグリーンメルスハウゼンを驚かせた。

「しなやかな身のこなして彼女は立ち上がり、深く一揖したのだ。」

「謹んで承ります」

「——グリーンユーネワルト伯爵夫人がことじゃが……」

あるいは後宮入りを慫慂する使者と思つていたのかも知れない。能面を思わせたコルネリア・ゲルトルーデの表情が初めて大きく動いた。グリーンメルスハウゼンが他者の表情を読むに長けていれば、驚きと怒りの他にある種の安堵を読みとつたに違いない。

「陛下は伯爵夫人に、白兵の心得のある婦人を傍に付けたいと思し召しじゃ」

「わたくしを、グリーンユーネワルト伯爵夫人の護衛にと……？」

フライヘレン

「さようじゃな。男爵夫人、陛下はそなたにその意があるや否やを質して来よと仰せ下された。そなたが望まぬのであれば、わしからそれと陛下に取りなし申し上げておけばよいことゆえに」

つかの間の沈黙が、さして広くもない室内を包んだ。コルネリア・ゲルトルーデは、表情から一瞬だけ見せた動揺の色をきれいに

に拭い去り、再び水面を思わせる無表情に塗り替えた。わずかに視線を逸らせ、壁に掲げられた数葉の写真を見つめるともなく見つめている。胸の裡から応えるべき言葉を拾い集めているようにも見えたり、むしろ、いつそ何も考えていない虚ろさとも見えな

いではなかった。
年の功というべきか、グリーンメルスハウゼンは回答を急かせようとは思わなかった。その行為に出ようともしなかった。執事が運んできたワイン・グラスへと手を伸ばす。

「四三六年ものか、よい品じゃな」

「——ご懸念には及びません」

「？」

一瞬、言葉の意を取り違え、グリーンメルスハウゼンは啞然として相手の顔を見つめる。沈黙の天使が何度か室内を横切つてから、ようやく理解のあぶくが弾け、言葉の意味が腑に落ちた。

「……そなた、かのミューゼル准将と意趣を構えたことはないのか？」

「仰っている意味がよく分かりません」

細い眉が大きく動くのが見えた。

「ラインハルト・フォン・ミューゼル准将のことを仰っているのであれば、准将は兄に良くしてくださいました。意趣を構えるどころか、感謝せねばならぬと思っております」

オーディン

「しかとそう思うかの？ 大帝陛下と大神に誓えるかな？」

優雅な一礼が回答に先行した。

「我が祖の名に誓ひまして」

「ふむ——」

なお微かなひっかかり……それが何なのか自身にとつても全く不分明だったが……を感じつつも、グリーンメルスハウゼンは相手の言葉を受け入れる以外の選択肢を持たなかった。

「よからう。そなたに異論なしとあれば、早速に陛下にお伝えしよう」

「恐れ入ります。帝国軍にて過分の地位を頂いてはおりますが、一艦一兵の指揮をも執つたことのない、この身にございます。白兵の技量であればいささかの心得もございませう。誓つて陛下のお言葉に応えてご覧に入れます」

「あくまでこれはご内意じゃ。よいかの、男爵夫人。具体的なお召しは明日かも知れぬし、あるいは半年の後かも知れぬ。陛下の御意志をさておいて、ぐたぐたとものを申す役人やら、権門の方々やらが多いことでもあるゆえ」

「承知いたしております」

初めて、グリーンメルスハウゼンの訪問を受けて初めて、コルネリア・ゲルトルーデは笑顔らしい笑顔を見せた。本来の美貌と明るさを取り戻したかに見え、グリーンメルスハウゼンを驚かせる。が、微笑は一瞬に消え、再び仮面めいた空白がその表情を包み隠してしまつた。

「……そういえば、そなた、ヴァインフリート卿と婚約の身であつたはずじゃな。式を挙げるはいつの予定じゃ？」

「そのような話題がお耳に届いておりましたか……恐縮でございますが、わたくしもヴァインフリート卿も今しばらく時を要するものと思っております」

コルネリア・ゲルトルーデはシュミットバウアー男爵家を継嗣した身であり、本来、他家へ嫁し得る身ではない。無論、シュミットバウアー男爵家の廃絶を覚悟の上であれば、問題はない。しかし、『シュミットバウアー侯爵家からの具申を軽く聞くな』との大帝ドルフ自身の遺訓が残されている家門であり、その廃絶は固陋な典礼省の許容するところではなかった。

一方、ヴァインフリート・フォン・リーフェンシュタールはリー

フエンシュタール伯爵家の三男であり、他家を継ぐに問題は少ないはずだった。問題は、リーフエンシュタール伯爵家がブラウンシュヴァイク公にもつながる名門であり、三男とはいえ、落魄したシュミットバウアー男爵家の女婿たる立場は、容易には容認されるべいという点だった。本人はともかく、周囲にとつては……である。

さらに話を厄介にしているのが、ヴィンフリートがすでに子爵号を許されていることだった。子爵号を捨てて、シュミットバウアー男爵の名を継ぐには典礼省の許可が必要であり、逆にシュミットバウアー家が子爵号を与えられるについては勅許が必要だった。

それやこれやで必要な煩雑極まる調整が、古びきつた帝国の官僚組織で処理されるとき、その進捗度は気の遠くなるほどの緩慢さとなるのは周知の事実だった。

「悪くすると二年はかかるのではないでしょうが」

「やれやれ、じゃな。しかし、ヴィンフリート卿とてすでに少将を拜命する身じゃぞ」

「はい、戦闘^{カンフ・バトル}集団指揮官職を拜受しております」

「であれば前線に出る身、形式にこだわっておつては、後々後悔の涙を絞ることもなり兼ねぬと思うがの……どうじゃな？」

「ご心配頂きましたけれど、無用のこととお思い下さい」

もう一度、コルネリア・ゲルトルーデは、今度ははつきりと笑って見せた。まるで花が開いたように、室内の照明までが一気に明るくなったようにさえ見えた。鋼の筋が入ったかのように背がぴんと伸び、それまで蒼緑の瞳だけに輝いていた活力が一気に全身に広がった。

「ヴィンフリート卿にもわたくしにもなすべきことがあります。それをなすまではなかなか兄や父の元へ参るわけには参りま

せん」

「なかなかの覚悟じゃが……あと、大きな声では言えぬが、陛下はあのような方じゃ、存じておるう、後宮に関する噂は——」

「——いいえ。臣下の分際にて、陛下のお噂をあげつらうなど、分に過ぎた振る舞いと心得ます」

「……では、独り言を言わせて貰おう。そなたを後宮へ入れるつもりはない、と仰った。しかしの、あの方は昔から気まぐれにおわした。そなたをお目に止められる可能性、これは否定できぬが、それでも構わぬのか？」

今度ははつきりとした躊躇の時が流れた。

再び微かな困惑と動揺をその表情に刻みつつ、コルネリア・ゲルトルーデは視線を上げた。

「……帝国の臣民として生まれたこの身である以上、万一にも陛下のご寵愛を頂けることあれば、身に過ぐる光栄と存じます」

「そうか……そなたの答えはしかと受け取ったゆえに、必ず陛下のお耳に達しあるよう、取りはからおつ……ああ、それからの——」

恐れ入ります——再び表情を消して、完璧な礼儀の中に感情を封じ込めようとしたコルネリア・ゲルトルーデに向かって、グリンメルスハウゼンは言葉を投げた。まるで、立ち上がる時のついで、ともいわんばかりの軽い調子だった。

「存じておるうが、わしはヴァンフリートとやら言う叛乱軍どもの版図まで出向いてきたところじゃ」

「……」

「陛下よりの御錠によつて、わしはミューゼル准将を麾下に伴うた。あの者を麾下に置いた、ただそれだけのことでわしの名が後世に残るかも知れぬ、と仰せじゃったよ」

「陛下は……」
それは図らずも、という調子でコルネリア・ゲルトルーデの口

から漏れた言葉だった。陛下はそれほどまでに、あのラインハルト卿を買っておいでになるのですか――。

「陛下の大御心など、わしごときに推察できるものではありません。せんよ、男爵夫人……そうじゃ、思い出した。そなた、ゲルタ、と呼ばれておったな。そのように呼んでもよいか」

「恐れ入りますが……」

金茶の髪が大きく左右に揺れると同時に、冷やかな峻拒を湛えた双眸が老貴族の視線を跳ね飛ばした。グリーンメルスハウゼンは慌てて目を逸らし、あわだしく咳払いをして立ち上がった。

「いや、これは本音じゃ。ミューゼル准将に關してだけは、わしも陛下のお心が読めぬ。まるで、それが我が身を食らう人食い獅子となるを承知の上で、我が庭に迷い込んできた美しい獅子を育てておられるような……いや、戯言じゃ。忘れてくれるがよいぞ」

グリーンメルスハウゼンには見えなかった。

彼を送りに、その背後に従ったコルネリア・ゲルトルーデの目に浮かんだ激しい瞋恚が、同時に深い困惑と動揺とをほらんだものであったことに。

コルネリア・ゲルトルーデ・フォン・シュミットパウアーが、グリーンメルスハウゼン伯爵夫人付き女官長補佐に任じられ、再びグリーンメルスハウゼン子爵によつて、皇帝の謁を賜つたのは帝国暦四八五年五月二三日の早朝だった。

「面を上げよ……」

まだ六〇歳そこそこの、本来壮年の男性であるべき人物から発

せられたとは思えぬほど、その声は囁れ、困憊して聞こえた。

コルネリア・ゲルトルーデが視線を上げると、そこには声に相應しい容姿の老人が玉座の上に蹲っていた――と見たのは彼女の錯覚である。華麗な玉座と、玉座に座すフリードリヒ四世の老い衰えぶりと、あまりに際だった対照が、彼女の視覚を混乱させたと言つて良い。

一方、珍しくも日が昇つて幾らも経たぬ時刻に謁見の間に入つたフリードリヒ四世が見たのは、目立たぬ淡い色合いの衣装に身を包んだ若い女性の跪礼だった。皇帝の言葉に従つて彼女が視線を上げた時、フリードリヒ四世は軽く身をのけぞらせた。それほどまでに、初めて至近に見る皇帝に姿に向けるコルネリア・ゲルトルーデの視線は朝かった。グリーンメルスハウゼン子爵をして無惨、と思わしめた裏れは消えてはいなかったが、双眸の宿した光はすでに兄を失う前の彼女のものだつた。

朝かったが、熱くはなかった。敬意と幾分かの畏怖はあつても、思慕や敬愛はなく、むしろ冷やかすぎるほどの觀察の目、値踏みの視線であることを皇帝は察した。丁度、あの美しい獅子の子が、完璧極まる儀礼の中に隠しおせている視線と等質のもの。いや、憎悪と嫌悪を伴わぬ分、透明度においてはより純度の高い辛辣さを感じさせる。

「そなたがシュミットパウアー男爵夫人か」

「初めて御意を得ます、陛下」

「そうか、初めてか……此度は大義じゃが、よしなに頼む」
「恐れ入ります。微才の身ではございますが、微力を尽くす所存にございます」

応えつつ、コルネリア・ゲルトルーデは違和感が全身を覆うのを感じる。これが皇帝。祖父、父、そして兄は、この人物に忠誠

を尽くし、尽くすことだけで人生を終えた。放蕩と荒淫に生命力を蕩尽し、今や老人と呼ぶ以外に表現のしようもない一個の老人が、彼らにとつての、そして彼女自身にとつての唯一無二の皇帝だというその事実は、虚脱に似た皮膚感覚を味わわせた。

「そちは訊かぬのか？」

不意に声が変わった。声が嗤いを含むのを、彼女は人外のものであるかのように聞いた。

「何を…でございましょうか」

「なぜ、予がそちにアンネローゼが身辺付きを命じたか、その理由をじゃ」

「叡慮、臣ごときの及ぶところではございませぬ」

空気の抜けるような笑い声が皇帝の口から漏れた。

「そうか、叡慮というか。予が考えをさして、そちの及ぶところに非ずというか」

「…御意にございます」

「予がそちに今宵の伽を命じても、なお、そちはそう言うか。皇帝の考えは、臣下などには付いていけないものではないと。それほどまでに皇帝が偉いのだと、そちはそう信じるか」

予想しない言葉ではなかった。しかし、コルネリア・ゲルトルーデは、意思に反して身体が固くなり、息が上がってくるのを抑えきれなかった。

「…今宵の…伽を…でございますか？」

思わず反問する彼女に、再び空気の抜けるような笑い声が応じた。

「冗談じゃ、捨て置け…にしても無礼じゃな、そちは」

「は——」

「そちは、予の問いに答えておらぬぞ」

「は——、陛下は銀河を統べたもう至高の御方でございます」

「叛徒すら平らげ切れぬ、無能の皇帝とは、そちは謗らぬのか。アンネローゼに溺れるがあまりに、日々の政務すらろくに執りもせぬ情弱者よと」

これは何なのだろう…混乱する頭でコルネリア・ゲルトルーデは思った。皇帝は、無論、彼女にそう教えた者たちが言うような神聖不可侵の現人神ではなかった。だが、同時にかつての『灰色の大公』、放蕩の限りを尽くした無能者が、たんなる幸運のみで至高の座についただけの男とも見えなかった。皇帝の目は、薄く幕がかかったように白く濁っていたが、決して知性の彩りを完全に失っていないかった。が、皇帝が『今宵の伽』云々を、心にもなく口にしたわけではないことを、彼女は直感してもいる。同時に発情した獣の雄めいた体臭を、彼女は臭覚以外の感覚に感じてもいたのだから。

「決して、そのような誹謗など…臣はシュミットパウアー男爵の名を継ぐ者にございます」

一瞬の動揺が去り、翠い双眸が皇帝をたじろがせた光の激しさを取り戻していた。

「シュミットパウアー男爵家は帝室のため、申し上げにくきことも敢えて言上すべしとして、おそれおおくも大帝陛下にお取り立て頂きました家柄でございます。そのシュミットパウアーの名を以て、敢えて申し上げますが、綸言汗のごとしと申します。皇帝陛下には、御心にもなき戯れ言をお口の端にすら、お上せあること、あつてはならぬことと恐れ入ります」

「よい。忘れよ」

陰惨な獣欲めいた目の光が消え、コルネリア・ゲルトルーデはためていた息をそと吐き出した。老いた野獣と対峙していたかのような緊張が、静かに全身の筋肉から去っていく。

——老いた野獣？

この皇帝のどこに、そのような危険さを感じたのか。改めて据えなおした視線の先で、彼女に一瞬の畏怖をもたらした男は自墮落に姿勢を崩していた。

「予は長くはない」

「は——？」

またしても意表をつかれ、彼女は皇帝の表情をすかし見た。確かにフリードリヒ四世の顔色は決して良くはない。予め六〇歳という年齢を知っていなければ、すでに八〇の坂すら越えているのではないかとさえ思われるほどだ。七六歳のグリーンメルスハウゼン子爵の方が、まだ若々しいと言うのはさすがに言いすぎだろうが。

では皇帝は死病に取り付かれているのだろうか。しかし、癌や、その後、人類を苦しめた様々な疾病の大半が克服された現在、銀河帝国皇帝ですら治癒を望めない病はほとんどないと言って良いのだが。ただし、フリードリヒ四世自身、皇后を『風邪をこじらせた肺炎』で亡くしてはいるのだが……

「陛下、お身体のお具合が……」

「生命を失うには常に病が必要とは限るまい、シュミットバウアーよ。知っておるか、帝国の辺境では食べ物足りぬという。何とやら言う惑星から氷を運んで灌漑をすれば、数十億人分の食料を増産できるとやら言う。新星やら、恒星の表面爆発やら、惑星気温の低温化やら、温暖化やら……予が昼寝をしておる間に、数十万、数百万の平民が死に、数千万が飢えておるとやら。いや、この帝都星ですら、一〇日ばかり前であつたかな。どこぞで地震が起きて数万ばかりの平民が死んだそうな」

「……」
「予は国務尚書に、救つてやれと言つた。しかし、尚書は肯つこ

とをせなんだ。なぜじゃ、と思う？」

「……」

「分からぬか。そちは聡明の質と聞いておつたが、そのそちですら分からぬか」

この世ならぬことを語るかのような虚ろな口調と、からからと干涸らびた嗤いがコルネリア・ゲルトルーデの背を寒くした。皇帝が何を言おうとしているのか、彼女にも分かりかねた。皇帝以外の何者かが取り憑いている、などと考えるには、そもそも皇帝のことを知らなすぎたが。

「金がない。国務尚書はそう言いおつたのじゃ」

「……」

「さなぎだに叛徒どもとの戦いで国庫は底を突いておる。先帝の蓄えた余剰金さえ、不要不急の事業やら、後宮の費えやらでとうの昔に消えてしもつた、とな」

それをなしたのは予じゃがな、と皇帝はさらに虚ろな笑いを上げる。

「それでは——」

黙つておられず、コルネリア・ゲルトルーデは言い差し、気づいた。今、削り得る国庫の支出と言えば、対自由惑星同盟戦の戦費である。それを削り、国内に振り向けよなどと主張すれば、『コルネリアス一世陛下の御遺志を否定し、叛徒との戦いに斃れた無数の忠良な臣民たちの英霊を裏切るかのごとき言動』として猛烈な反発を受けるだろう。現に、祖父ゴドフリート、父コルネリウスは共に止戦を具申し、それゆえの非命に倒れている。

皇帝が薄く笑い、囁れた声をやや高めた。

「叛徒との戦いを止めれば金ができる、そう言いたそうじゃな」
「御意」

驚いたが否定する気はなかった。兄ヨハン・クレメンツがこの

場があれば、必ずその主張をしただろうから。

「このままではゴルデンバウム帝室に対し奉り、帝国臣民の反感をいたずらにかき立てるだけと愚考いたします」

「予には何もできぬ。何もする気はない」

「……」

「予に今の帝国を立て直すような力はない。その意思も持つ気はせぬ。そのような面倒なこと、予の後を継ぐ者がしてのければ良からう。それが、ゴルデンバウムの名を名乗らぬ皇帝、あるいは皇帝と呼ばれる者でならないかも知れぬが、そのようなことはどうでも良いことじゃ。違うか、シュミットバウアーよ」

「ゴルネリア・ゲルトルーデは不意に後頭部をハンマーで一撃されたような衝撃を感じた。皇帝は言っているのだ。『予は長い』ではなく『予が王朝は長くない』と。」

「……分かったようじゃな」

つまりフリードリヒ四世の意図は、ゴルデンバウム王朝滅亡に際して、愛する寵姫たるアンネローゼの身を守れ、とそういうことなのだろうか。ゴルデンバウム王朝の最期、すなわち銀河帝国の最期が自身の治世の間に来る、フリードリヒ四世はそう予想しているのだろうか。

「予にはもはや余り望むところはない。名君と呼ばれようなどと

いふ

思つたこともない。暗君、昏主と呼ばば呼べ。死後のことなど、予の知つたことではないわ……唯一、望むところがあるとすれば、なし得る限りの華やきをもって、予が終焉の時を迎えること……のような気がする。滅ぶなら精々華麗に、な。この新無憂宮も……そうじゃ、予の後宮も含めて、葬送の送り火には相応しかろう。そう思わぬか、シュミットバウアー——」

「ゴルネリア・ゲルトルーデは言葉に窮する自分に驚いていた。偉大な大帝ルドルフから三六代、五〇〇年の歳月の果てに佇むこ

の老人は、二二年あまりに過ぎぬ彼女の人生からでは敷衍することすらできぬ巨大な虚無をその体内に抱え込んでいたのだ。その意味で、すでにフリードリヒ四世は人ではなかった。ゴルデンバウム帝室の亡霊。そう呼んでさえ良かったのだ。

「近く……」

皇帝が手招きするのに、ゴルネリア・ゲルトルーデは半ば催眠術にかかったような気分で従う。

手の届く距離にまで歩み寄り、跪いた彼女に、皇帝は傍らの金庫から数葉の書類を取り出すと、無造作に手渡した。

さすがに驚き、ゴルネリア・ゲルトルーデは弾かれたように顔を上げた。

「陛下——」

「読むがよい。しかと頭に入れよ」

「これは……？」

見慣れた双頭の鷲の刻印こそされていたものの、奇妙なほど滑らかで最上質の絹織物を思わせる手触りは、銀河帝国政府の公式文書に使われるものとは明らかに異なっている。ワードプロセサの無個性な印刷文字の代わりに紙面を占めるのは、力はまだで感じられないが丁寧な肉筆だった。

「陛下……このようなものを……」

「予が直筆じゃ。そちに渡しておく……いや、待て、予が花押をせねばならぬ」

これも見慣れぬ形のペンを取り、皇帝は思いがけぬほどの巧みさで書類にサインを入れると、封蝋で封筒に封じた。

「しかと読んだな？」

「御意にございますが……」

「そちがシュミットバウアーであるがゆえに、これをそちに委ねるのじゃ。心して持ち帰るがよいぞ。よいか、そちがまことにシュ

ミットバウアーの末裔であるならば、予が思いを裏切るでない。せめて、シュミットバウアーのみは真の我が帝室が真の藩屏であつたと語り継がれることを、そちが名誉と思うのであれば、な」渡された封書はまるで鉛の塊を思わせて掌に食い込むようだった。

それは勅書だった。銀河帝国皇帝フリードリヒ四世の名において、シュミットバウアー男爵に対して命じていたのだ。

『予が生前にして玉座を逐わる時、我が遺骸とアンネローゼを送るに新無憂宮すべてを火の内に投ずべし。新無憂宮を包む火を以て、我らが葬送の送り火となすべし。いかなる事態においても予の遺骸とアンネローゼを敵にわたさざるべし。暗殺の場合もこれに準じて葬送をなすべきこと。病にて逝きし時には、葬送の儀を待ち、アンネローゼに殉死を促すべきこと。我が他の妻妾もまた、その意志に任せるべきこと。以上、構えて背くべからざること』

「どのようなことがあれ、たれがどのように思おうとも、アンネローゼが心は予が許にある」

華麗に滅び行くこと、滅びに際してはあくまでアンネローゼを伴うこと。ただその二点のみ執着したかのごとき勅書だった。啞然とした表情を隠し得なかったコルネリア・ゲルトルーデに、皇帝は嘲笑を向けた。亡霊の笑い、亡者の哄笑に似たそれは、またしても彼女の背に粟立つ思いを抱かせるに十分だった。

「予がどれほどの愚物と思うておるか知らぬが、僅かほども心を開かぬ女を七年も寵愛できるほどの鈍物とは思ふまいことじゃ」

これが我が皇帝、されど我が皇帝。コルネリア・ゲルトルーデをして暗然たらしめた思いは、つまるところ皇帝には通じてはいなかったのだが。

「歴代、シュミットバウアー男爵は口うるさいものと聞いておつ

たが、そちは物静かでよいな。折を見てしばしば伺候するがよい」退出を命じる皇帝の言葉がそれだった。コルネリア・ゲルトルーデは、敢えて言葉を返すことで宮廷儀礼の命じる完璧な貴婦人の礼を踏み外して見せた。

「兄が生きてあれば、陛下にはさぞシュミットバウアー男爵の伺候を小うるさくお感じになれたものと」

批判と聞いたのか、皮肉と聞いたのか、フリードリヒ四世は明確な反応を示さなかった。